

「みんなで守ろう！」境界線を築く指導実践

— 自立活動での取組み —

大阪精神医療センター分教室

1 傷つかないように、気づいて、築く「境界線」

筆者は支援学校の現場で、養護教諭として性問題行動のある知的障がいや発達障がいの児童生徒への指導・支援を実践してきた。そのような児童生徒に個別指導を行うと、児童生徒が「境界線」を破った事実と、またその反対に境界線を破られた経験が語られることが多い。加害した児童生徒の心の根底には被害を受けたつらい経験がある。

「境界線」を指導する目的は、傷つかないように自分を守るためであり、相手や周りの人の思いに気づいてお互いに安全安心に暮らしていくためだ。そして、境界線破りがあった時や境界線がわからない時に、話し合うことで具体的なルールとして共有できる境界線を築くことである。このことから、「境界線」は性問題行動のある児童生徒に限らず、子どもも大人も誰もが学ぶ必要があると言える。学校は社会に出る前の大切な場所であり、境界線を学ぶ最適な場所だと考える。

本稿では、教育現場での「境界線」を意識できる指導実践のポイントや工夫を紹介する。

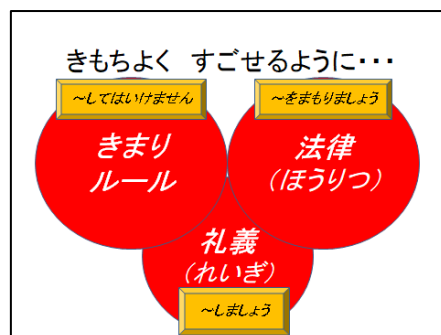
2 「境界線」の授業における指導アイデア

(1) 写真や動画の活用

からだや所有物、空間に関する「物理的境界線」と、生活の中にあるさまざまなルールやマナーなどの「社会的境界線」は最も教えやすい内容である。学校生活の中での様々な場面を取り上げ、児童生徒に考えてもらえるような教材作りをめざした。例えば、「友だちの机の上にある筆箱を勝手に触っていいのか?」、「いきなり体を触られたらどう思うか?」、「電車やバスの中でのマナーは?」、「着替える場所での工夫は?」、「ルールを守らない人がいると周りの人はどう思う?」などをテーマに、具体的な場면을教員が登場する写真や動画を使ったり、実際に教員が演じたりして視覚的にわかりやすくした。

写真や動画にはたくさんの教員が登場するため、児童生徒にとっては、周りの大人が境界線を意識していることが伝わり、学校全体のルールや約束であることを感じることができる。また、教材作成の準備の中で教員同士が話し合いながら写真や動画を撮影するため、児童生徒の課題についての議論や相談が交わされ、自然と指導の方針を共有することができた。

「社会的境界線」においては、学校生活の具体的な決まりやルールを取り上げるとわかりやすい。例えば、時間を守って行動をすることや、授業中勝手に立ち歩かないマナー、朝登校すれば「おはよう」の挨拶をする礼儀など、日々の生活で教えていけることがたくさんある。交通マナーや飲酒喫煙・薬物などに関する法律も、自分の安全や健康を守るためだと伝えることができる。



安全な「人との距離、腕1本分」を指導する際には、次のような実験を見せている。2人の教員がお互いに向き合い、一方の教員が遠い距離からもう一人の教員に向かってゆっくり近づき、これ以上近づかないでほしいところで「ストップ!」と言う。すると、必ず腕1本分よりも外で止まることがわかる。その後、引き続き、もう一人の教員がその腕1本分の距離の内側に近づいてもらい、その時の近づかれた教員の表情を見て、相手の気持ちを聞くと、不快な表情や、「怖い、びっくりする、気持ち悪い」などの相手の感情を推察することができる。

指導の注意点として、実際に児童生徒がこの実験をすると、ふざけてしまうことがあるので、児童生徒の実態に合わせて実施を検討するとよい。また、人がたくさん集まる場所など、さまざまな場面で腕1本分の境界線が保てない場面があり、境界線は相手や場面、場所が変わることを伝える必要がある。


(2) 歌や踊りを取り入れる

境界線の指導については、児童生徒にわかりやすく、そして記憶に残る指導を常に考えていたなか、音楽とリズムが入ると児童生徒の反応がよいと感じていた。そこで思いついたのが、「境界線音頭」である。簡単な踊りと歌で「人との距離(片腕の距離)」を伝えることができる。教員が対になり、腕を伸ばし、その腕の先が自分と他者との境界線を意識できるように踊る。「境界線、境界線、私とあなたの境界線」と歌いながら踊ると、支援学校の現場では、一緒に児童生徒が踊るようになった。授業以外の学校生活の場面で、「距離が近い、離れなさい」と生徒に注意すると、過剰に反抗されてしまうことがあった。好ましくない距離やタッチがあったときに、教員が歌ったり踊ったりするだけで児童生徒を叱ることなく、注意や促しができるようになると、児童生徒も話を聞いてくれるようになった。

他にも、体感的にわかる境界線の指導として、傘をさしながら狭い道をすれ違うときに、傘が当たらないようにするための工夫を考え実際に教室で実演したり、教室内を他の児童生徒や教員とぶつからないように自由に歩いてみたりするなどがある。

プライベートパーツは、性の境界線を示すもので、身体的・心理的・社会的境界線のすべてを含み、どの年代であっても何度も伝えておく必要がある。その性行動のルールについても、歌を作り、プライベートパーツを大切にする思いが伝わるように工夫した。

人との距離(きょり)
→ **片腕(かたうで)の**
距離(きょり)をとろう!



境界線音頭(きょうかいせんおんど)

きょうかいせん 【右うでを横にのばす】
きょうかいせん 【左うでを横にのばす】
きょうかいせん 【両うでをのばして
体を右まわりに回転】
きょうかいせん 【両うでをのばして
体を左まわりに回転】
あなたとわたしの きょうかいせん♪

プライベートパーツのうた

みせない さわらない プライベートパーツ
みせない さわらない プライベートパーツ
たいせつ たいせつ プライベートパーツ
みんなで まもろう このからだ
みんなで まもれば いいなかも
せいしんいりょうセンター ・ ぶんきょうしつ
やくそく
みせない さわらない プライベートパーツ
みせない さわらない プライベートパーツ

(3) 遊びやスポーツから学ぶ「境界線」と「気持ち」

境界線を学ぶ際に最も大事なことは、「気持ち学習」である。快・不快や喜怒哀楽といった気持ちを理解できていない、もしくは感じないようにしていることで、人の気持ちや相手との距離感もつかめなくなっていると感じた。自分の気持ちに気づくことは、衝動コン

I 実践報告

トロールができるようになるためには欠かせないし、相手の気持ちを考えるためにも必要なことである。

支援学校での自立活動の授業において、学校のグラウンドでドッチボールやリレー、鬼ごっこなど体を使うスポーツや遊びを取り入れた授業のなかで、「境界線」や「気持ち」を意識した指導を心がけている。

特に、活動中に感じた気持ちを教員が積極的に言語化するようにした。「緊張する、楽しい、怖い」など、児童生徒の気持ちの言語化を促す前に、教員が表現するようにした。すると、自然と児童生徒も「気持ち」を言語化するようになった。

それぞれの活動には、ルールがあり約束がある。しかし、児童生徒の中には、細かいことでのルールの取り違いや誤解などから、児童生徒同士のトラブルに発展することが多かった。そこで、児童生徒や教員が全員で話し合う時間をとるようにした。ホワイトボードに、トラブルになった場面やルールが複雑で混乱している場面を図にして書き出し、児童生徒や教員が意見を言い合い、新たなルール作りをおこなった。すると、児童生徒は、話し合える環境があるとわかると、活動でのトラブルや疑問があったときに、相談しにくるようになり、その度に話し合いを重ねた。児童生徒の眼差しが日に日に変わっていった。

性暴力の被害防止の観点から「やめて」としっかり意思表示できるようになってほしいと常日頃思っていた。そこで、皆が知っている遊びである「鬼ごっこ」を通して「やめて」を学ぶ「やめて鬼ごっこ」を思いついた。ルールは、鬼は教員が担当し、児童生徒は逃げる。氷鬼ごっこと同じルールで、鬼にタッチされたら、その場で止まり、周りの助けを呼び児童生徒にタッチされれば復活し逃げるができる。このルールに加えて、児童生徒が鬼に向かって目を見て指を差しながら「やめて!」という、鬼が5秒止まる、という新たなルールを追加した。他にも工夫として、児童生徒の走力によって鬼を増やしたり、鬼が止まる時間を短くしたり、児童生徒が鬼役をすることもできる。

3 言葉の暴力を考える

心理的境界線は見えにくいため、「相手は不快に感じていないか」と察したり、尋ねたりしないと、知らず知らず相手のところに土足で踏み込むような境界線破りをしてしまっているかもしれない。児童生徒の中には、ひどい言葉を投げかけられ傷ついたり、人が傷つくような言葉を平気で言ってしまう者もいた。そのため、暴言や暴力による児童生徒同士のトラブルがあった際には、教員が振り返りを行っている。出来事を詳細に振り返り、どのような気持ちを感じ、どのように考えたかを丁寧に聞き取る。そのなかで、必ず、言葉の暴力について、相手の気持ちや本当に伝えたいことは何かを一緒に考え言語化を促している。集団指導においては、道徳や自立活動の授業のなかで、言葉の暴力について、言葉の意味や相手がどう思うか、自分ならどう思うかを全員で話し合うようにしている。

4 いつでも、どこでも、だれでも指導できる「境界線」

学校での境界線に関する指導においては、個別や集団指導での性教育を実施するにあたって、私は、養護教諭だけでなく担任やその他の教員を巻き込んで実施してきた。また、病棟と連携し境界線の指導に取り組んでいる。学校や病棟だけでなく、たくさんの大人が関わり、いつでも、どこでも、だれでも「境界線」の指導ができる社会こそ、すべての人にとっての安全な社会だと思う。これからも粘り強く取り組んでいきたい。